

算 数 通 信

テーマ：話題は3つあります

1 算数科の「個別最適な学び」のねらい

一斉授業だけの学習形態のくり返しでは、子どもの学習意欲を喚起することや維持することに限界があると感じる。さらに「能動的な学び手を育てる」という大きな目標から見ると、一斉授業だけで「自ら学びを続ける力」を育てることは難しいと考える。そこで、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実が示された。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の手段であり、最終的には、すべての教科教育において「能動的な学び手を育てる」ことを目標にしている。それでは、算数科における「個別最適な学び」のねらいとは。

算数科における「個別最適な学び」のねらいは、「既習事項を使って（数学的な見方・考え方を働かせ）、新しい知識をつくり出す（統合的・発展的に考える）子どもの姿（資質・能力）」を引き出すことであり、最終的に「能動的な学び手」を育てることである。

しかし、算数では学習すべき内容がある。子どもの学習歴では理解できない内容や、系統的にとらえられない内容がある。そういうことから、学習内容のすべてを子どもに委ねることは難しい。

だから、算数で目指すべき「個別最適な学び」は、学習内容は保証しつつ、自ら探究する学習の場（発展的に考える学習場面のこと）を使って、学び続ける力を育てることが必要だと考える。発展的に考える活動は、一斉授業の学習形態でも行いたい。

2 子どもが受け身になる

教師が、子どもに丁寧に教えたとしても、次につながらないことがしばしば起こる。それは、教師が教えに入った時点で、子どもが受け身になるからだと考える。受け身になることは、心の動きがなくなること。だから、思考の働きが鈍る。その場限りの納得で終わる。紆余曲折しても、自分たちで考え結論に達したときの授業がいい。大変非効率な授業ではある。しかし、学んだことが子どもの記憶に残り易いのではないか。子どもたちを見ていてそう思う。

3 受け身の状態を少なくしたい

受け身の状態は少なくしたい。どうするか？

問題・問題解決を自分ごととして捉えさせることだ。「めあてづくり」に子どもたちを参加させることも、その一つだ。生活場面に問題を設定する単元づくりもある。しかし毎単元は難しい。

そこで、大事にしていきたいのは、問題解決に向かった「授業内コミュニケーション」をつくることではないか。なぜか。子どもが問題解決の主人公になっていない。問題解決のた

めの授業内コミュニケーションが、大体に少ないと思う。

- 自力解決後、挙手指名した 1 人の考えを聞いて、その 1 人の考えから、次々と発問を重ねる授業を見る。他の子の考えは、後から聞かれるが、その時はもう子どもの発表意欲はなくなっている。
- 子どもの発言が終わっていないのに先生がとってしまって、立派な意見に変えてしまう授業がある。それは子どもの考えでなく、先生のものだ。
- 子どもたちが単語で発表しているのに、「いい考えですね」と言って、子どもを褒める授業がある。「最後までいいなさい」と指導するのだから、文章で発言させたい。

以上のようなことをしないためにも、**教師が自分の出番を控える**ことだ。

意見発表・交流は子どもが主人公である。まず、自力解決後は、全部の考えの発表だ。発表が終わったら、これから「協議すべきこと」を先生が示し、協議中、教師はできるだけ出番を控え、子どもの発言を優先する。そして、大事な言葉を子どもから」引き出して、まとめまで導く。